
ありがとう。（未定）

ひかる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ありがとう。（未定）

【Nコード】

N1006Z

【作者名】

ひかる

【あらすじ】

双子の兄弟の弟として生まれた光は中学3年の頃に兄の守が事故にあい意識不明のまま入院中、そして片思いの相手が同時に引越してしまい同じ高校にいけなくなり、夢に見てた高校生活が平凡な毎日にかわった。

そして高校2年になった今、何かが動き始まる。

光の今そして未来に変化が起こり始めた。

片思いしてた彼女との再開、守の目覚め。光の絶望を癒してくれた高校で知り合った同級生のありさ。

そして大人になり記憶喪失になってしまった光を助けた麻衣とともに暮らす光。

そして光を待ち続ける守たち。

そして記憶を取り戻したとき光はどう変わってしまう？

悲しみに埋まった過去（前書き）

小説内に登場してくる人物などはすべて現実とは一切関りがありません。

誤字や途中で話が骨折してしまうかもしれないので注意してください。

悲しみに埋まった過去

僕、星野^{ほしの} 光^{ひかる}が若葉高校に入学してから二度目の春を迎えた。

一年前、僕が期待したような高校生活はなかった。

部活動で活躍し、彼女もいて・・・そんな絵に描いたような高校生活に期待を持っていた。

それも、ただの夢で実現する事することはなかった。

それはそれで、落ち込んだが僕が一番落ち込んだのは……………。

中学三年の受験当日。

僕らは無事に受験を受け終わった。

若葉高校に来た時に上った急な坂を下った。

僕は友達の内田^{うちだ} 雄哉^{ゆづや}と雑談していた。

雄哉はとても疲れたようだった。

「ハァー、疲れたぁー！」

「調子はどうだった？」

「俺・・・ヤバイかも」

「そうなんだ、僕は調子よかったな」

「うわぁー、慰めてくれないんだ！」

「うん」

「それにしても、いいよなー。光は内申だけでもう、受かっているようなもんだもんなっ！」

「それはさ。普段頑張っているからだよ」

「ノートをきれいに工夫してとるなんて、俺には無理だなあ」

「ちゃんと、話を聞いてノート取れば、テストだって良い点数とれるしまさに一石二鳥なんだよ？」

「今更だけどお前ってどんだけ優等生なんだよお！」

「それも中学までな、僕は高校で『青春』というものを味わいたんだ！そのために頑張っているんだ」

「なんだよ！それじゃあ、俺には『青春』がないって言ってるもんじゃねえか！」

「そんなつもりはないけど……」

「あ、俺用事があつたんだ！時間がないからじゃなっ」

「うん、またね！」

僕は大声で坂を急いで下っている雄哉に言った。

そして、僕はまた歩き出した。

30分ぐらいで僕は家に着いた。

「ただいまー」と僕は靴を脱ぎながら言った。

「おかえりなさい！」とリビングの方から母の声がした。

僕はそのまま階段を上り、自分の部屋に行った。

そして制服から私服に着替えて、部屋を出た。

階段を降りたところで、母さんがリビングからこっちにやってき

た。

「ひかるちゃん、受験どうだった？」と母さんは背後から聞いてきたので僕は靴を履き終え母さんの方を向きながら言った。

「調子良かったから、多分大丈夫」と微笑みながら言った。

「それなら、よかったわ。これから守に会いに行くんでしょ？」

「うん！」僕は返事をしながら立った。

「それじゃあ、行ってきます！」僕はドアを開けながら言った。

いつてらしゃい・・・という母さんの声がドアを閉める音で途中でしか聞こえなかった。

そして僕は城崎病院に向かった。

城崎病院には僕の双子の兄、星野^{ほしの} 守^{まもる}が入院している。

事故だった。

守と僕は志望校が違ってた。

僕は普通に守と同じ高校に受かればいいと思ってたので家に近くてレベルも普通よりちょっと高い若葉高校に進学するつもりだった。でも守は「声優になりたい！」と言い、夢ヶ谷声優専門校を受験することになった。

だから、僕もそれを応援した。

受験を無事に終えた守に僕は映画と一緒に見に行こうと誘った。けれど僕は約束の日、僕が片思いをしている同級生の田村^{たむら} 鈴音^{すずね}に受験対策の勉強会に誘われた。

僕は一回断ったけど、守が「一人で行くから大丈夫！」と言ってくれたので僕は勉強会に参加した。

勉強会は田村さんの家でやった。

その途中で一通の電話が来た。

母さんからの電話だった。

「は、早く！し、し城崎病院に来なさい・・・ま、ま・・・まもるがぁ・・・事故に・・・事故に遭ったの」

母さんは泣きながら僕に伝えた。

電話はすぐに切れた。

僕はすぐに城崎病院に行った。

泣いている母さんを父さんが慰めていた。

「どうしたんだよ！　いったい何が起こったの？！」と僕は父さんに問いかけた。

「ま、守が交通事故に遭ったんだ、バスに車が激突したんだ・・・今、緊急手術をしている」と父は涙を抑えながら言った。

僕は呆然に立っていた。

何をすればいいのかわからなかった。

ただ、僕が無事にここにいる事ができるのが守があの時、勉強会に行かせてくれたから・・・そして守が事故に巻き込まれたのは僕が誘ったから・・・。

僕は自分を責めた。

手術は無事に終わり、守の命は確保されたがあれ以来、守の意識は戻らなかった。

次の日、クラスメートのみんながお見舞いに来てくれた。

僕は学校を休んでずっと病室の守が寝ているベットの隣の椅子に座っていた。

みんな慰めてくれ帰っていった。

あれから一週間がたち。

母さんと父さんそして僕の中にある悲しみは徐々におさまった。

そして守の病室に順番で通う事が星野家の日常になった。

僕の家のポストに二通の手紙が送られてきた。

僕と守は見事に受験で受かったのだ。

そして、卒業式を僕は迎えた。

守のいない卒業式。

仲が良かった友達と一緒に卒業証書を持って守の寝ている病室に行った。

みんなでいろんな話をした。

そして、みんな帰ったけど田村さんだけが残ってくれた。

空気は重たかった。

何か話さないといけないと思った。

しばらく沈黙の状態が続いたけど田村さんが話しかけてくれた。

「あの・・・あの時、言えなかった事があるんだけど・・・」

「え？あの時ついていつ？」

「勉強会のときに言えなかった事・・・」

「で、何を僕に言えなかったんだ？」

僕は緊張しながら彼女の顔を見た。

すると彼女は頬を赤くしてた。

それを見て、僕は告白されるんじゃないかと少しは期待したが、成績優秀で運動神経が良い彼女が僕なんかを好きなる訳がないと思いい、少し落ち込んだ。

「私。引越すから光君とは同じ高校に行けないの・・・だから」

「え！なんでだよ!？」

僕にとつてあまりにも残酷なことだったので、彼女の話している途中で大声で聞き返してしまった。

「せっかく、人見知りの私のために志望校合わせてくれたのに・・・ごめんね」と彼女は言い病室を出て行った。

僕はすべての事にやる気をなくした。

これが僕の中学生時代一番の思い出だった。

悲しみに埋まった過去（後書き）

読んでくれた皆様有難う御座いました。

感想やアドバイスを書いて貰えたとより良い作品になるとおもっています。
で書いてもらえるとうれしいです。

再開（前書き）

小説内に登場してくる人物などはすべて現実とは一切関りがありません。

誤字や途中で話が骨折してしまうかもしれないので注意してください。

再開

僕は夢を見た。

悲しい夢。

一人の男の子がいた。

男の子は地面に座っていた。

しばらくすると一人の女の子がやってきた。

男の子に問いかけた。

「ねえ、君も一人なの？」と問いかけた。

男の子は女の子の方を向いたが何も喋らない。

すると女の子は男の子の隣に座り込んだ。

そして何かをし始めた。

指で地面に何かを書いている。

男の子も書き始めた。

何を書いたかは知らない。いつも途中で僕の朝はやってくるからだ。あまりにも毎日のように見るので僕はその続きを気になっていた。懐かしくて、悲しい夢。どこかに今の自分が描かれているようだ。

「おーい、聞いているかぁ？光！」隣で雄哉が話していた事を僕は完全に忘れていた。

そして雄哉はまた話始めた。チャイムが鳴り終わるまでずっと話していた。僕はというと曖昧な返事をしながら夢の事を考えていた。

学級委員の号令と共に授業は始まり終わる。寝ている奴もいるけど殆どの人はノートを静かに取る。小声で話している奴もいる。それはどこにでもあるような日常だった。誰もそれに違和感を感じない。だが今日は特別だった。転入生が僕らのクラスに来るようだ。

だから若葉高校2年3組の生徒一同はテンションが普段より高か

った。女の子？男の子？美人などクラス中に転入生について期待していた。

そして暫くして担任の西野にしの

沙由梨

さゆり

通称サツちゃん先生がドアをあけて入ってきた。騒がしい空気が一気に静まり返った。

「先生ー転入生は？」雄哉が聞いた。

「それがね、まだ来てないのよ」と先生は困ったように言った。

その瞬間クラス中にえーっと声が響いた。その時、廊下の方から誰かが走ってる音がした。音はどんどんこっちに近づいてきた。

「はぁ、はぁ……遅れてすいません」一人の美少女が息をきらしながらドアを開けて小さい声で言った。あまりにも可愛かったのでクラス中のほとんどの奴が可愛いと言ってしまった。僕以外のほとんどの人が言ったんだ。

「た、田村さん？」（ま、まさか。田村さんがここにいるわけがない）

彼女は何も言わずただ先生の指示に従い教室に入り黒板に田村鈴音と白いチョークで書いた。そして改めて僕らのほうに振り向いた。

彼女は僕の前の空席についた。

その時、僕に再び希望の光が見えた。今更何が出来ると次の瞬間

僕は絶望に落ちていった。とりあえず、様子を見ることにした。

一時間、二時間と時間だけが流れていく。彼女はまだ何も話しかけてこない。

ついに僕は我慢できなくなり放課後に彼女に声をかけることにした。

放課後。

校庭から打球音、かけ声などが教室の中にまで響いてきた。まるでドラマの撮影をしているような気持ちになった。僕は少し緊張をしていたが彼女の寝顔に見入っていた。なので僕はぐっすり眠っている彼女を起こさないように静かにしていた。

だが、そこで教室内にボールが飛んできた。僕はボールを拾いに行った。テニス部のボールだった。

どうしようか少し悩んでいた。その時、教室のドアのところで雄哉が荒く息を吐いて立っていた。

「はぁ・・・はぁ・・・お、光かぁ・・・わりいけど、そのボールこっちに投げてくれ・・・」

僕は頷いて雄哉のいるドアの方にボールを投げた。雄哉がどっかの運動部に入ってたのは知っていたがテニスだったとは知らなかった。なので僕は少し驚いてしまった。普段の雄哉なら、絶対僕がなぜまだ教室にいるのか聞くのだが雄哉は田村さんが寝ているのを見て納得した顔をして立ち去ろうとしたが僕は止めた。

なんで、田村さんがここにいることについて何も聞かないんだよ。逆に僕が聞いてしまった。そうすると雄哉は自信ありげに言った。

「転入生が来るってことが学年中いや学校中で広がってるからな」
雄哉はそういい、走って立ち去った。そして僕はまた田村さんの席の方に戻ろうと振り返ったら田村さんが起きていた。

うわぁ！僕は驚いて声に出してしまった。いつから起きていたんだろう・・・。

「えと・・・なんでまだいるんですか？」

あ。僕いつも放課後教室に残って空を見てるんだ。綺麗だよな！と僕は頑張ってて言い訳をした。そうすると田村さんは窓の方を見た。

「うわぁー。本当だ！綺麗だ」

僕も空を見た。確かに綺麗だった。夕日のオレンジに空は染まっていた。

再開（後書き）

しばらく次話投稿が遅くなりましたが読者の皆様ありがとうございました。

次話投稿を楽しみにしてくれと嬉しいです。

読んでくれた皆様有難う御座いました。

感想やアドバイスを書いて貰えるとより良い作品になるとおもつので書いてもらえるとうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1006z/>

ありがとう。（未定）

2012年1月8日17時53分発行